

教えられた「君子の交わり」

三原朝雄

大平先生は、風貌、醸し出す雰囲気から一般には「茫洋」であると評されていますが、私の知る先生は「慎重」かつ「細心」、一度進路を決めると何の障害をもものともせず専心努力する型の人でした。

特に私が近しく先生とお付き合いをいただいた時期は、昭和五十二年から五十三年にかけてでした。当時、先生は幹事長、私は国対委員長との立場で円滑な国会運営を行うため働きました。先生の態度は、終始一貫、私達、下で働く者を信頼され、十二分な意見交換の後、最終的に方向が決まると、雨が降ろうと嵐になろうと、テコでも動かず、目的遂行に邁進されました。

私はこの時に、先生のなかに宰相の器を見出しました。わが党内には首相候補が、あの当時、五人は存在したでしょうか。私自身は中間の立場でしたので、特定の先生の下で指導を受ける状態ではなかったのですが、確かに先生には、私をして真底から敬服せしめる頭領の材の魅力がありました。少し浪花節調ですが「男心に男が惚れた」のでしょうか。

五十三年十二月、大平先生が総理大臣になられ、私は先生の下で今度は総理府総務長官として働くことになりました。

当時、総理府には元号法制化の重大懸案が持ち込まれておりました。これには野党諸君の強い反対があり難航は必至だったのですが、先生の言はただ、「三原君、十分に力を発揮して下さい。問題が起れば私が責任を取り

ます」でした。

部下としてこれほど意を強くし、同時に責任の重大さを痛感する言はありませんでした。

自らが君子になるためには未だ遠い道程を歩まねばなりません。先生にお会いするたびに思い出す言葉は「君子の交わりは淡き」と水の如し」です。

先生は寡黙、私も饒舌とは明らかに言い難い性格です。「三原君どうですか」「ええ、まあまあです」「万事よろしく頼みます」「はッ」。これでは他人が聞けば禅問答のようですが、先生にしても私の側も、意を尽くした積りでした。

国際化の波が激しく押し寄せる今日、東洋の哲学、倫理に造詣深い先生が、西欧の先進諸国に新しい道を示しながら、世界平和に貢献していただけるものと期待しておりましたが、突然のご他界で、私は失望のどん底に落とされたように感じました。

しかしながら、私どもは先生の強いご意志を学び、世界に範たる国家「日本」をめざし精励いたす覚悟です。

合掌。

(衆議院議員・第一次大平内閣総理府総務長官)